

2次せん断変形を考慮したねじり特性について

学生員 ○佐 伯 昇*
正 員 横 道 英 雄**

1. ま え が き

先に発表した論文¹⁾において、2次せん断変形を考慮した箱桁の解析を行なったが、この論文では実際の桁を対象にして両端単純、両端固定、一端単純他端固定支承の場合について解析を行なった、又変断面について弾性荷重法を用いて解析した。

2. 解析の概要

ねじりによるそり W は θ_0 に比例するそれによって、そり応力、2次ねじりモーメントは各々 θ_0'' 、 θ_0''' に比例して出てくる。この2次のねじりモーメントによって2次のせん断変形 θ_1' が生ずる。これによる全体のねじり率は $\theta_0' + \theta_1'$ となる。

$$1 \text{ 次ねじりモーメント} : m_t = GI_t(\theta_0' + \theta_1') \quad (1)$$

$$2 \text{ 次ねじりモーメント} : \bar{m}_t = -EC_w \theta_0''' \quad (2)$$

$$\text{拘束ねじりモーメント} : m_w = -EC_w \theta_0'' \quad (3)$$

$$2 \text{ 次せん断変形} : \theta_1' = -\alpha_0 \theta_0''' = -\frac{EC_w}{GI_t} \alpha \theta_0''' \quad (4)$$

$$T = m_t + \bar{m}_t = GI_t \theta_0' - EC_w(1 + \alpha) \theta_0''' \quad (5)$$

$$\bar{\lambda} = \sqrt{GI_t / (EC_w(1 + \alpha))} \quad (6)$$

2-1 両端単純支承の場合 ($x = a$ に $M_T = 1$ が載荷)

$$\text{境界条件} \quad x = 0 : \theta_0 = 0, \theta_0'' = 0$$

$$x = l : \theta_0 = 0, \theta_0'' = 0$$

荷重点 a の左右について $\theta_{\sigma左} = \theta_{\sigma右}$, $\theta_{\sigma左}' = \theta_{\sigma右}'$

$\sinh x$ は shx , $\cosh x$ は chx と表示する

$$C_2 = -sh\bar{\lambda}b / sh\bar{\lambda}l \quad \bar{C}_2 = -sh\bar{\lambda}a / sh\bar{\lambda}l,$$

$$x' = l - x, \quad b = l - a$$

$$0 \leq x \leq a \quad \theta = \left(\frac{b}{l} x + \frac{1}{1 + \alpha} \cdot C_2 \frac{sh\bar{\lambda}x}{\bar{\lambda}} \right) / GI_t$$

$$a < x \leq l \quad \theta = \left(\frac{a}{l} x' + \frac{1}{1 + \alpha} \cdot \bar{C}_2 \frac{sh\bar{\lambda}x'}{\bar{\lambda}} \right) / GI_t$$

$$0 \leq x \leq a \quad m_t = -\frac{b}{l} + \frac{1}{1 + \alpha} \cdot C_2 \quad ch\bar{\lambda}x$$

$$a < x \leq l \quad m_t = -\frac{a}{l} - \frac{1}{1 + \alpha} \cdot \bar{C}_2 \quad ch\bar{\lambda}x'$$

$$0 < x \leq a \quad \bar{m}_t = -\frac{1}{1 + \alpha} \cdot C_2 \quad ch\bar{\lambda}x$$

$$a < x < l \quad \bar{m}_t = \frac{1}{1 + \alpha} \cdot \bar{C}_2 \quad ch\bar{\lambda}x'$$

$$0 < x \leq a \quad m_w = -\frac{1}{1 + \alpha} \cdot C_2 \frac{sh\bar{\lambda}x}{\bar{\lambda}}$$

$$a < x < l \quad m_w = -\frac{1}{1 + \alpha} \cdot \bar{C}_2 \frac{sh\bar{\lambda}x'}{\bar{\lambda}}$$

2-2 両端固定支承

$$\text{境界条件} \quad x = 0 \quad \theta_0 = 0 \quad \theta_0' = 0$$

$$x = l \quad \theta_0 = 0 \quad \theta_0' = 0$$

$$x = a \quad \theta_{\sigma左} = \theta_{\sigma右}, \theta_{\sigma左}' = \theta_{\sigma右}', \theta_{\sigma左}'' = \theta_{\sigma右}''$$

2-3 一端単純他端固定支承

$$\text{境界条件} \quad x = 0 \quad \theta_0 = 0 \quad \theta_0'' = 0$$

$$x = l \quad \theta_0 = 0 \quad \theta_0' = 0$$

$$x = a \quad \theta_{\sigma左} = \theta_{\sigma右}, \theta_{\sigma左}' = \theta_{\sigma右}', \theta_{\sigma右}'' = \theta_{\sigma左}''$$

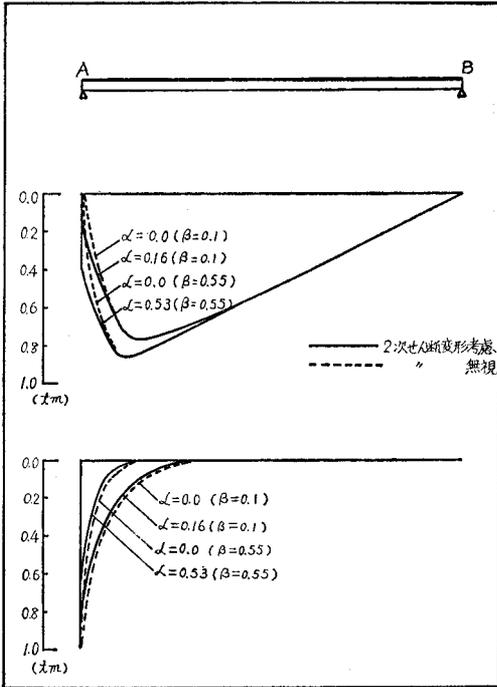
これらの θ を求める時は $\theta_0' + \theta_1'$ を積分して $x = 0$,
 $x = l$ において $\theta = 0$ を用いる。

3. 等断面の計算例

桁高 H と巾 B の比 $\beta = H/B$ を0.1~0.55まで変化させると α は0.16~0.53に変化する。この場合ウェブ厚40cm, 床版厚20cm, スパン30mは一定にした。これらの場合の2次せん断変形を考慮した場合とこれまでのねじり理論²⁾とを比較した。単純支承においてそれほど差はないが固定支承において明らかな差が出てくる。すなわち固定支点的1次ねじりモーメントの影響線においてこれまでのねじり理論では0であるが2次せん断変形を考慮した場合 α の値に従って1次ねじりモーメントが出てくる。それに従って2次ねじりモーメントが小さくなる。又拘束ねじりモーメントはこれまでの理論より小さい値となる。

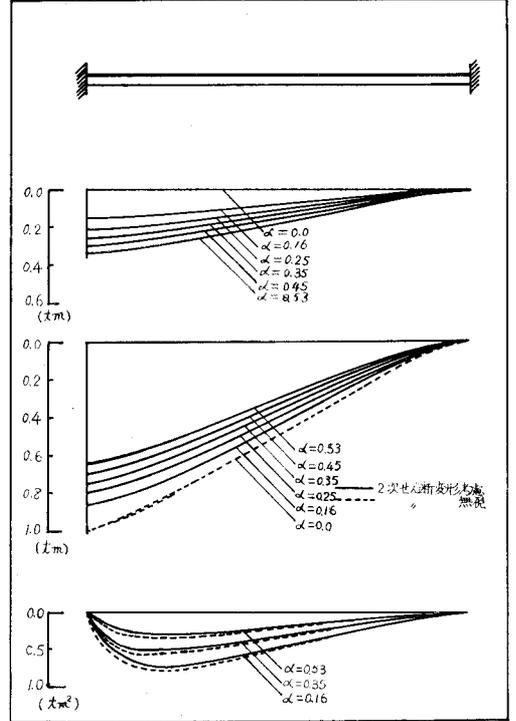
* 北海道大学 大学院

** 北海道大学 教授 工博



図一 1 次ねじりモーメント影響線(支点)(上)

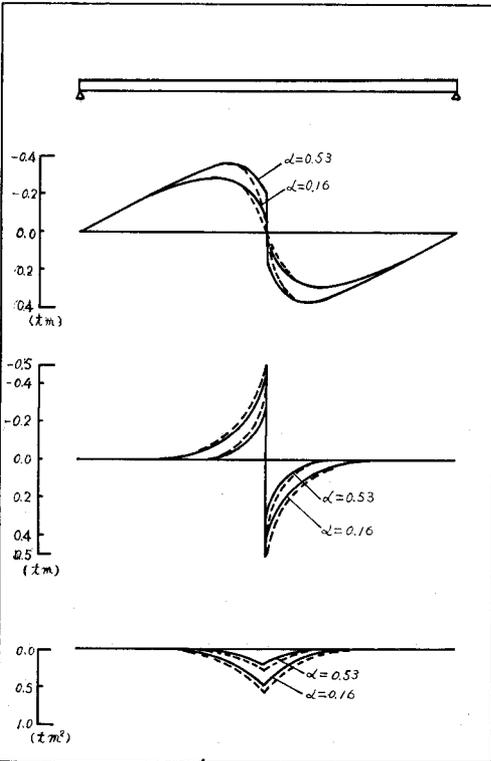
図二 2 次ねじりモーメント影響線(支点)(下)



図六 1 次ねじりモーメント影響線(支点)(上)

図七 2 次ねじりモーメント影響線(支点)(中)

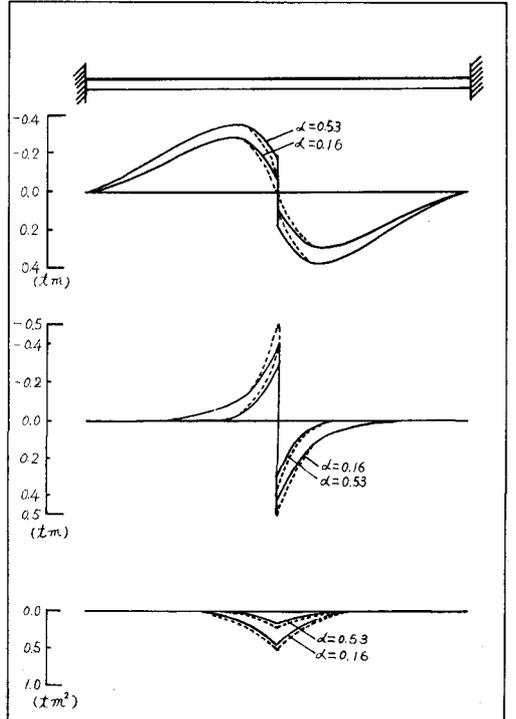
図八 拘束ねじりモーメント影響線(支点)(下)



図三 1 次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)

図四 2 次ねじりモーメント影響線(中央点)(中)

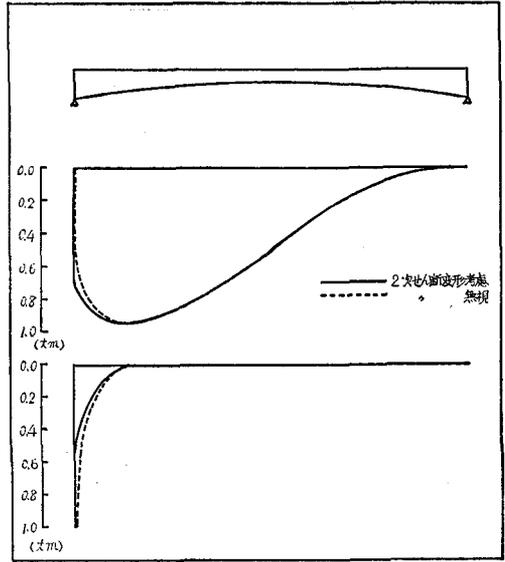
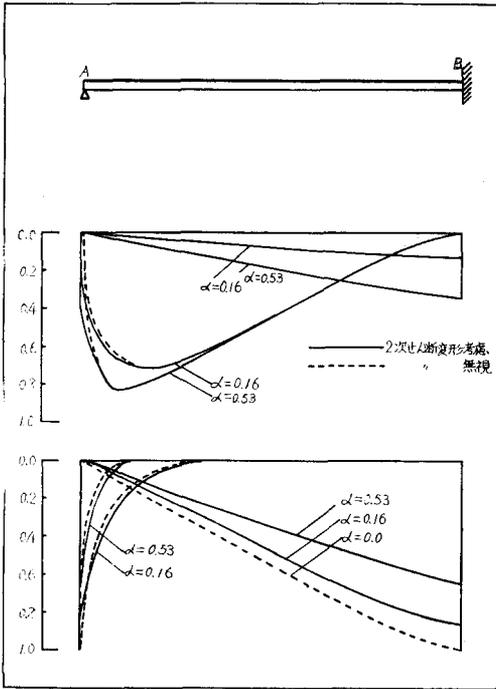
図五 拘束ねじりモーメント影響線(中央点)(下)



図九 1 次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)

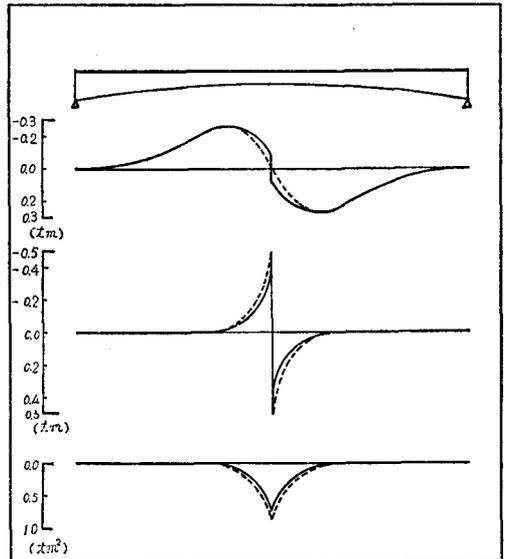
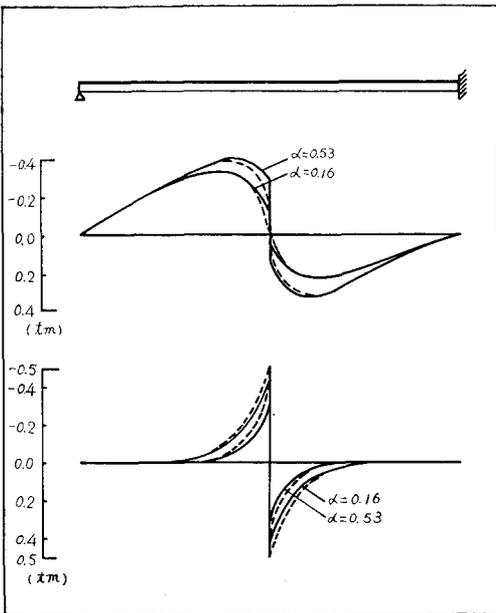
図一〇 2 次ねじりモーメント影響線(中央点)(中)

図一一 拘束ねじりモーメント影響線(中央点)(下)



図—16 1次ねじりモーメント影響線(支点)(上)
 図—17 2次ねじりモーメント影響線(支点)(下)

図—12 1次ねじりモーメント影響線(支点A及びB)(上)
 図—13 2次ねじりモーメント影響線(支点A及びB)(下)



図—18 1次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)
 図—19 2次ねじりモーメント影響線(中央点)(中)
 図—20 拘束ねじりモーメント影響線(中央点)(下)

図—14 1次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)
 図—15 2次ねじりモーメント影響線(中央点)(下)

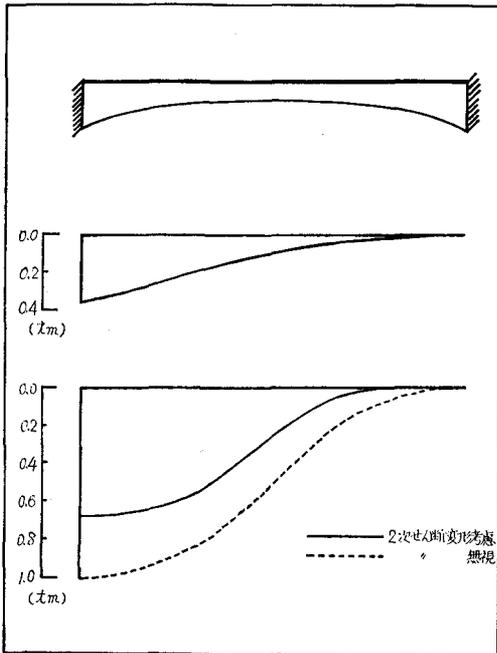


図-21 1次ねじりモーメント影響線(支点)(上)
 図-22 2次ねじりモーメント影響線(支点)(下)

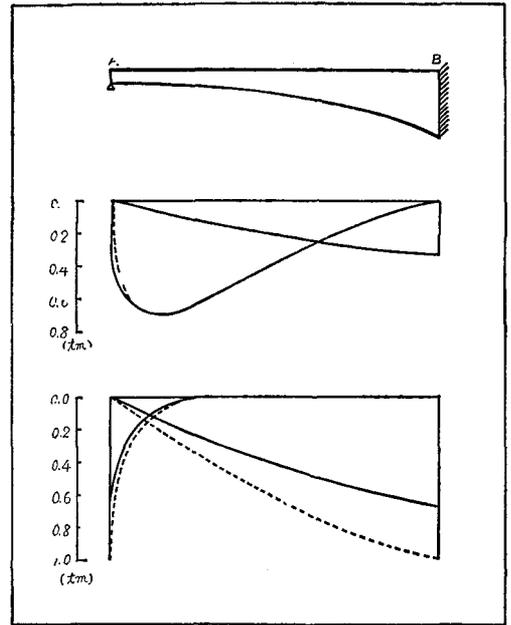


図-25 1次ねじりモーメント影響線(支点A及びB)(上)
 図-26 2次ねじりモーメント影響線(支点A及びB)(下)

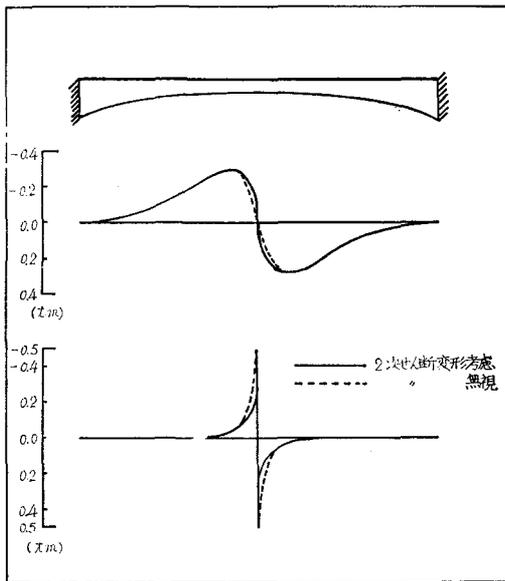


図-23 1次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)
 図-24 2次ねじりモーメント影響線(中央点)(下)

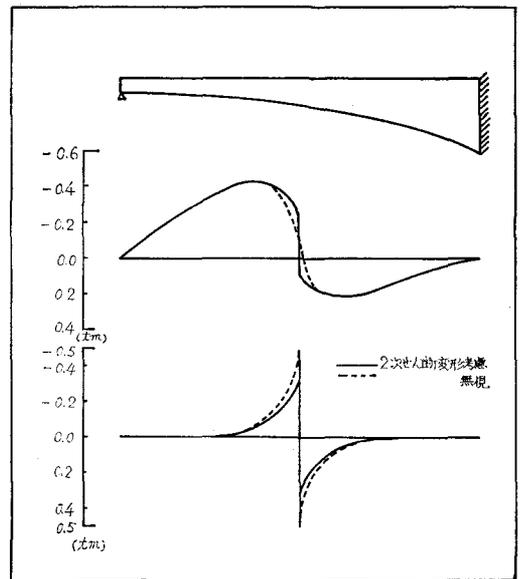


図-27 1次ねじりモーメント影響線(中央点)(上)
 図-28 2次ねじりモーメント影響線(中央点)(下)

